

彦根市埋蔵文化財調査報告 第23集

鳥籠山遺跡発掘調査概要報告書

平成4年3月

彦根市教育委員会

序

滋賀県は、全国的にみても文化財が多い地域です。これらの文化財について地元の人々に多く語り継がれているものに「お寺が織田信長の兵火を受けた時に、村人がご本尊を運び出し、土に埋めて守った」という話があります。その真相は不明にしても、文化財というものが、数多くの人々の手によって現在まで伝えられたものであることをうかがえる伝承といえましょう。

この様に、文化財をその歴史的な流れの中でみると、それが国民共有のものであるといわれますことがよく理解できます。文化財の保護は、過去の人々から現代の私たちに託されたものです。

本書は「遺跡」という形で現代に伝えられた文化財の一端を収めたものです。地域の歴史の解明と、文化創造の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、文化財保護の精神をご理解いただき、鳥龍山遺跡の発掘調査に多大な協力を惜しまれなかつた中正商事株式会社をはじめとする関係各位に、厚くお礼を申し上げます。

平成4年3月31日

彦根市教育委員会

教育長 和田 豊治

例　　言

1. 本書は、中正商事株式会社の宅地造成工事に先だち実施した、鳥籠山遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 今回発掘調査を実施した場所は、彦根市正法寺町字鳥籠山 110 - 24 番地他である。
3. 調査は、中正商事株式会社の委託を受け、彦根市教育委員会が実施した。
4. 調査は次の体制で実施した。

彦根市教育委員会	社会教育課長	川 北 貢
	同課庶務係長兼文化財係長	日 夏 秀 喜
	同課文化財係技師	本 田 修 平
	同課文化財係技師補	清 水 千 恵

5. 現地調査には、次の諸氏が参加した。（敬称略）

大堤須美子	鈴木千代	出口加寿夫	西川又治
原 弥助	古川 久	松林 愛子	

記して謝意を表したい。
6. 本書で使用している北は、磁北である。
7. 出土遺物等の資料は、当教育委員会で保管している。

1. はじめに

(1) 地理的環境

鳥籠山遺跡の所在する正法寺町は、地理的に見れば、南約1kmのところを流れる芹川によって形成された、扇状地河岸段丘上に位置している。現在、東海道新幹線・名神高速道路が通るとともに、以前からの交通路としては、旧中山道および旧の多賀大社への道が通る、文字どおりの交通の要衝である。これは、彦根市東部から多賀町・米原町にかけての滋賀県（近江国）と岐阜県（美濃国）とを画する、靈仙山系の西端に位置しているという、地理的条件によるところが大きいといえよう。

以上のような地理的条件を考えれば、当遺跡周辺は、古代からの交通の要衝ではあったが、ある程度の農業技術の進歩がなければ、現在のような、一面に田が広がる、人文地理的景観は形成されなかつたと考えられる。

(2) 歴史的環境

この地域は、大きくは芹川水系として一つのまとまりを持っていると考えられる。芹川は、近世の彦根城築城の際、現在位置につけ替えられたもので、もともとは北流して松原内湖に注いでいた。この芹川水系で最も古い時期の遺跡として、松原内湖遺跡がある。この遺跡は、琵琶湖流域下水道東北部浄化センターの建設にともない、昭和60年度以降、滋賀県教育委員会による発掘調査が行われており、縄文時代後期から晩期にかけての遺物一とりわけ、旧の内湖岸から内湖中に立地していることから、籠胎漆器や丸木舟等の木製品一を数多く出土している。また、弥生時代以降の遺物も内容豊かなことから、引き続いて人々の生活の拠点となっていたと考えられる。この他、「彦根市史」によれば、千代神社裏山古墳および正法寺町付近の古墳から出土した、古墳時代後期の須恵器があげられている。市史には明確な所在地の記載がないため、その所在地を特定することはできないが、少なくとも、正法寺町から旧千代神社のあった東山にかけて、後期群集墳が存在していたことは確実であり、この時期には一つの地域的なまとまりをなしていたと考えられる。

また、宅地造成工事に先だち、当遺跡の裾部の発掘調査を平成元年に行った。調査時ににおいては、国道306号線から東へ階段状に水田がひろがって山裾をめぐる道にとりつく地形であった。瓦の散布は、山裾に近い部分でみられるため、山裾の道から一段低い畑と、更に一段低い水田にトレーンチを設定し、発掘調査を実施した。畑に設置したトレーンチでは、

瓦の入った薄い包含層の下は、地山の岩と、南半分では粘土層となり、ピット以外の遺構は確認できなかった。また、水田の部分は谷すじにあたり、瓦の入った厚い包含層で、トレンチ内の東半分を更に1.5mほど掘り下げたが、この包含層の底を確認することはできなかった。この包含層には、瓦のほか、焼け土・炭・灰・白色粘土等も混っていることから、層的に堆積したとは考えられず、二次的に堆積したと考えられる。地元の人によると「鳥籠山は非常に崩れやすく、この崩れたところを整地して水田にした」とのことである。すなわち、灰原や崩れた山土で谷が埋まったあとに、水田を作っていたと考えられる。出土した遺物のほとんどが瓦であり、その他須恵器と、ごく少量土師器がある。軒丸瓦は、外区に「重覆文」・内区に「單弁蓮華文」をもつもの、外区に「鋸齒文」・内区に「複弁蓮華文」をもつもの、の2タイプがある。軒平瓦は、外区に「珠文」・内区に「唐花文」をもつものである。のことから、白鳳時代後期から奈良時代前期にかけてのものといえる。

芹川右岸の地域については、まだまだ調査が進んでいないため、十分な歴史的な環境を述べることはできない。現時点で明らかな点からまとめてみれば、次のようになる。旧松原内湖周辺は、生活環境が比較的安定しており、縄文時代後期以降、継続的に人々の生活が営まれていく。また、扇状地河岸段丘に位置する当遺跡付近は、古墳時代以降、人々の顕著な活動がみられ、特に白鳳時代から奈良時代の前期にかけては、交通の要衝という立地条件もあり、瓦の生産地となるに至る。

(3) 調査の経過

中正商事株式会社（以下原因者とする）は、平成元年の鳥籠山裾部の第一期宅地造成工事に引き続き、鳥籠山の第二期宅地造成工事を計画した。当該地は、鳥籠山遺跡の範囲であることから、前述のとおり発掘調査を行ったが、その結果から、鳥籠山の南斜面には、窯跡の存在が予想されることを原因者に報告した。

このため、第二期工事計画がある程度進んだ時点で、原因者との事前協議を行った。その後、原因者から、平成3年11月28日付で発掘届の提出および調査依頼があり、12月10日付彦教委社第1557号で発掘届の進達ならびに発掘調査通知を滋賀県教育委員会教育長あて提出した。

事務手続終了後、窯跡の位置を明確にするため、試掘調査を行うこととした。試掘調査は、裾部で遺物の散布・出土のあった区域の山の斜面の表土を重機でめくり、その後手作業で遺構・遺物の有無を確認することとした。その結果、中腹の傾斜がやや緩やかになる傾斜変換点よりやや下方で、幅1.5mほどの、焼け土や炭・灰等と、瓦等の入った落ち込

みを確認した。この結果を原因者に伝え、以後本調査を行う必要があるとして、再度協議を行い、平成4年1月24日付で本調査の委託契約を締結した。

発掘調査は、1月27日から3月10日まで行った。その後、出土した遺物や図面等資料の整理作業を行い、3月31日をもって全ての作業を完了した。

2. 調査結果

調査は、試掘調査で窯跡と推定された落ち込みを中心に、最大幅16m、最大長10mのトレンチを設定し、東側をE区および西側をW区とした。また、この地点から10m西で瓦の包含層を確認したため、N区およびN-2区としてトレンチを設定した。

(1) E区およびW区トレンチ

窯跡と考えられる落ち込みは、第2層（赤褐色土）を除去し、地山を出した時点で検出されたため、調査作業は、まず重機で掘り残された赤褐色土の掘り込みから行った。

（W区）

前述の赤褐色土を取り去ると、風化のすんだ岩からなる地山となった。

窯跡は、よわい尾根すじの東側端に、等高線とほぼ直交するように、地山を掘り込んでつくられている。現存で幅1.5m・長さ4m・深さ0.4mを計る。そのプランは、長く伸びたやや不整形な「U」字形をしており、上端の幅はほぼ半分、先端部は半円形に突き出し、浅い「皿」状に掘り込まれていた。床面は、長さで1.5m位のゆるやかな段状にフラットな面を2段検出し、更にやや段差が大きく落ち込んで下に続いているものと考えられる。先端の幅の狭いフラットな面を含めれば、4段のフラットな面の残存が確認できた。この下方は、等高線がやや山側に回んでいることから、地山が崩壊して遺構が残らなかつたと考えられる。

遺構は、通常の窯跡でみられる、床等の焼け面は確認できなかった。また、遺物も、流れ込みと考えられる5~10cmほどの粘質土層の上にのった状態で出土しており、窯の操業が一たん終了した後、灰や瓦・土器等が投棄されたものと考えられる。

窯内から出土した遺物は、須恵器と瓦である。このうち、須恵器は壺と甕とで10数個体で、この中には、焼き歪んだものも数点あった。壺蓋は、内側にかえりをもつものが1点、残りは大型化して端部がシャープに垂下し、内側にかえりをもたないものである。壺身は、大型化して「ハ」の字形に開く高台がつくものである。甕の高台と考えられる、強く「ハ」の字形にひらくもの、また、口縁がたいらに外側にひらき、胴部が長甕状に伸びる甕が1

点ある。

瓦は布目の平瓦がほとんどであったが、1点、大型のものが出土している。残存で最大幅30cm・最大長40cm・厚さ5cmの大きさを計り、半截した「蒲鉾」形の輪郭を残し、片面は弧の内側ほぼ20cmの部分で粘土が剥れた跡を残し、もう片面は平滑に調整して、直径8cmの縄掛風の突起がつく。この大きさや形状から、かなり大型の道具瓦一おそらくは、鷲尾である可能性が強いと考えられる。

〈E 区〉

第2層の赤褐色土を取り去ると、黄褐色から白色の粘土層となる。絶えず上からの湧水が流れる、ゆるやかな谷すじにあたり、ここに粘土が堆積したと考えられる。

W区の窯跡から東へ3mの地点で、等高線にはば直交する「ハ」の字形の落ち込みを検出した。灰や炭とともに瓦が出土していることから、窯跡である可能性を考え、中央にセクション帯を残して掘り込んだ。この結果、上からの幅1.2mほどの落ち込みは、粘土質の強い部分が段状に残っていたことから、谷すじの水の流れた跡と考えられる。

この下半分は、平面的には「馬蹄形」の落ち込みが4ヶ所ほど集まった不整形なもので、落ち込みの傾斜も強く、1.5mほどの掘り込みや、一部掘り残しとみられる島状の部分もあり、更に焼け面も確認できないことから、粘土の採取跡の可能性が強い。この採取跡の穴を、灰や炭・瓦などの捨て場として再利用していたと考えられる。また、窯壁の一部とみられる焼けた粘土片もここから出土している。

出土した遺物のほとんどは、布目に格子叩のついた平瓦であったが、この他に数点の軒丸瓦があった。外区に「素文」・内区に肉薄の「単弁蓮華文」をもつもの。外区に「素文」とその内側を「珠文」でかざり、内区に肉薄の「単弁蓮華文」をもつもの。外区に「重圓文」・内区に肉厚のしっかりした「単弁蓮華文」をもつもの。以上の3タイプに分けることができる。

(2) N区およびN-2区トレント

山裾をめぐる道の断面を観察した結果、瓦の包含層が確認できたことにより設定したトレントで、N区に6m×10m、N-2区に6m×5mで設定した。地形的には、N-2区から急激に落ちこんで斜面となり、N区のやや平坦な面に至る。

土層は、基本的には、谷に向って流れこんだ堆積層である。岩の風化によってできた黄褐色粘土質土層が厚く堆積し、その下の青灰色粘土層からは、少量ではあるが平瓦が含まれていた。しかし、多量に瓦が出土したのは、第3層の褐灰色土層であり、そのため、基本的には同一であるが、瓦をほとんど含まない層を第4層とした。

この堆積状況からみて、瓦溜り等の瓦の集積した場所から、連続的に流れ込んだもので、二次的な堆積層と現時点では考えている。

出土した瓦のほとんどは、布目に格子叩のついた平瓦であったが、10点ほど軒丸瓦が見られた。そのいずれもが外区に「重圓文」・内区に肉厚のしっかりした「單弁蓮華文」をもつタイプである。

3. ま と め

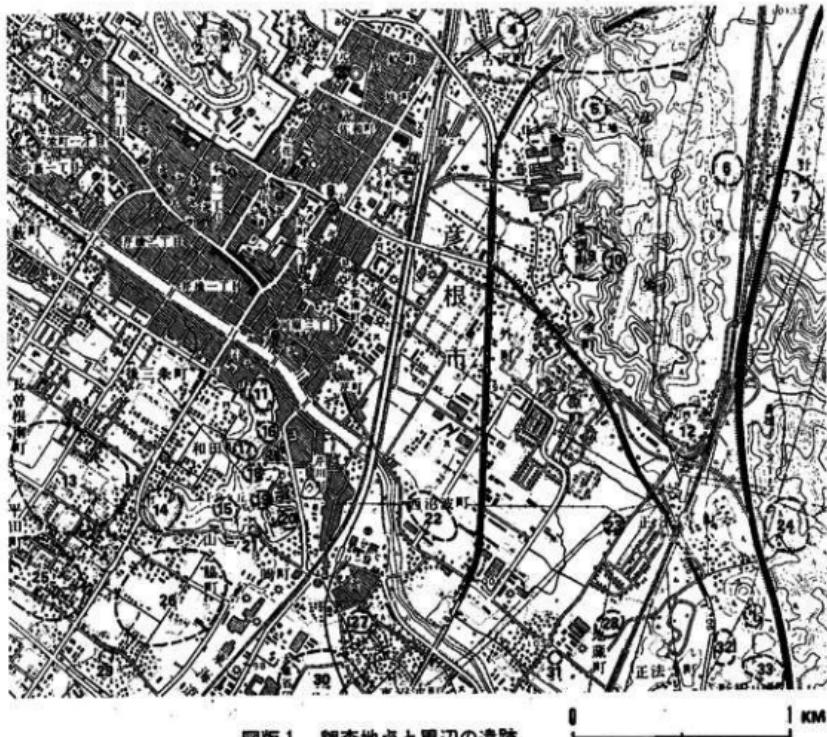
鳥籠山遺跡の発掘調査は、平成元年に次ぐ第2次調査になるが、ここでは、前回の調査結果をもふまえながらまとめをしてみたい。

まず、今回の調査で確認したW区の遺構について、床の焼け面が認められなかったにもかかわらず「窯跡」とした理由であるが、第1に、地山の整形をあげることができる。すなわち、この遺構は、地山の岩を二段に掘り込んで整形している。また、遺構上部をとり囲むように地山を「U」字形に掘り込み、特に「煙道部」と考えている部分は、地山の表面をフラットな斜面にていねいに整形している。第2に、遺構掘り込み面は、まわりを幅50cmほどのフラットな面にして窯の基底部をつくっていること。また、床面を段状に掘り込んでいることなどをあげることができよう。ただし、この地山の岩は、相當に風化がすんでいることから、高熱に耐え難く、窯本来の床面は、粘土でつくっていたと考えられ、今回検出した遺構は、窯の基底部がかろうじて残存したもので、焚口等、下半分はすでに崩壊したものと考えている。

今回の調査で出土した瓦は、3タイプの「單弁蓮華文」系軒丸瓦のみであったが、前回の調査では「複弁蓮華文」系軒丸瓦および「唐草文」タイプの軒平瓦が出土している。このことから、鳥籠山遺跡では少なくとも二時期にわたって瓦の生産を行っていたと考えられる。

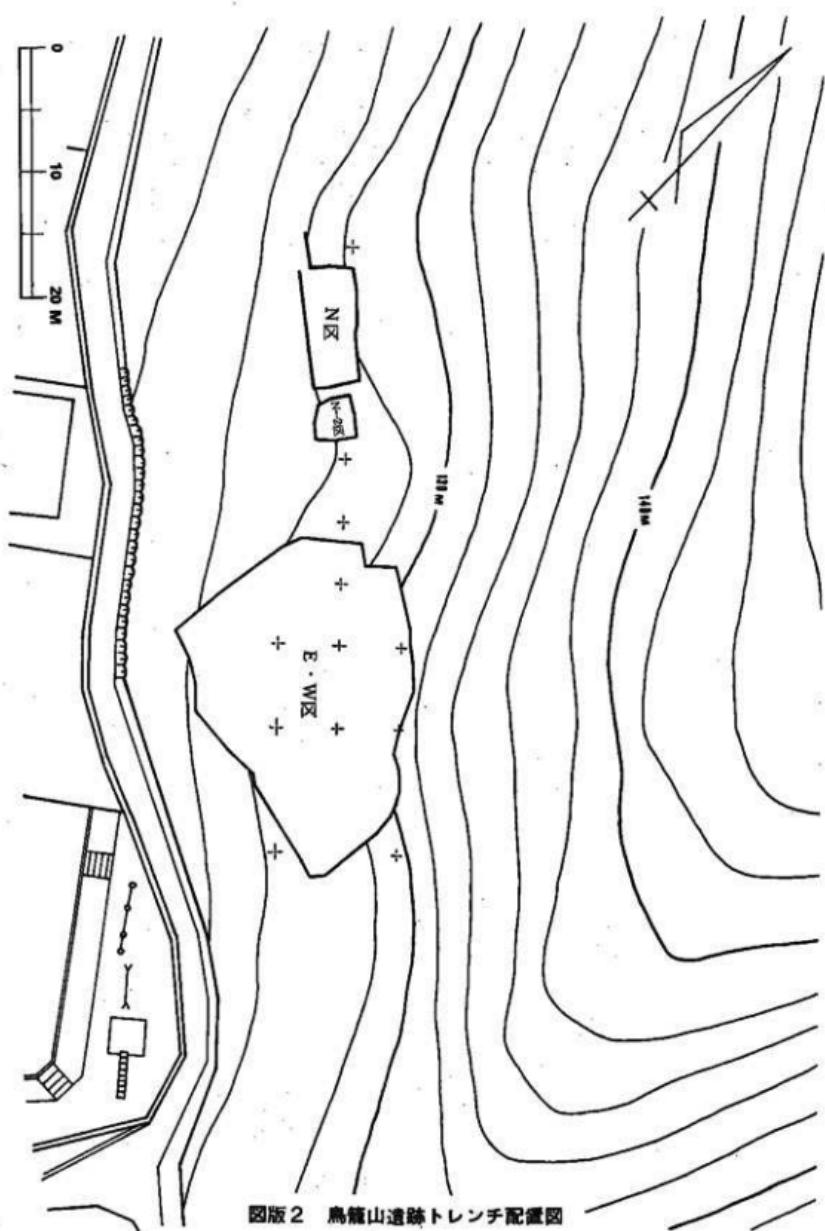
さて、ここで生産された瓦がどこに供給されたか、という問題は、誰もが興味のあることであろう。彦根市内およびその周辺の古代寺院跡については、まだ調査例が少ない。また、今回の調査も、土のう袋100袋もの遺物の整理作業は十分に進んでいないため、明確な結論を出すことは早計であろう。ここでは、「重圓文」で「單弁蓮華文」タイプと類似した軒丸瓦が竹ヶ鼻廃寺跡で、「素文」で「單弁蓮華文」タイプと類似した軒丸瓦は屋中寺廃寺跡で出土していることを指摘するにとどめておく。

また、「鶴尾」ではないかとみている大型の道具瓦については、他に類例が乏しいため、今後の調査・研究成果を待ちたい。

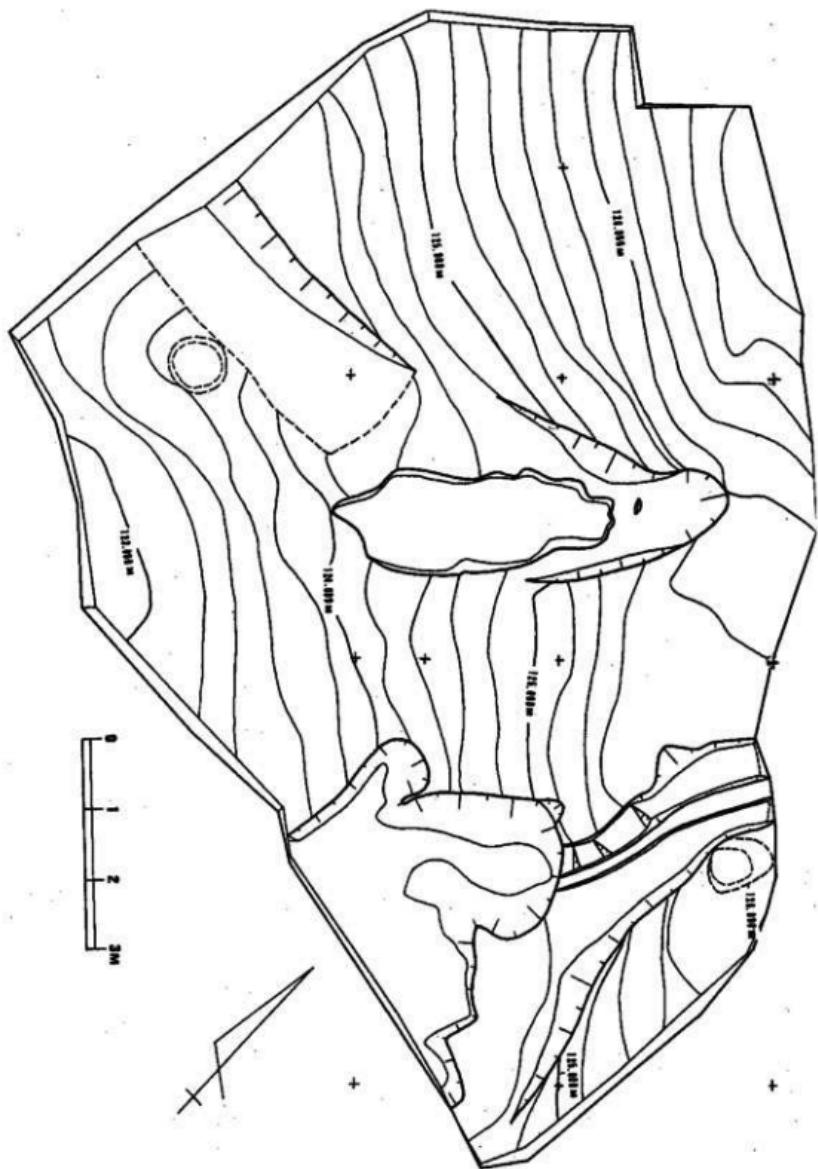


図版1 調査地点と周辺の遺跡

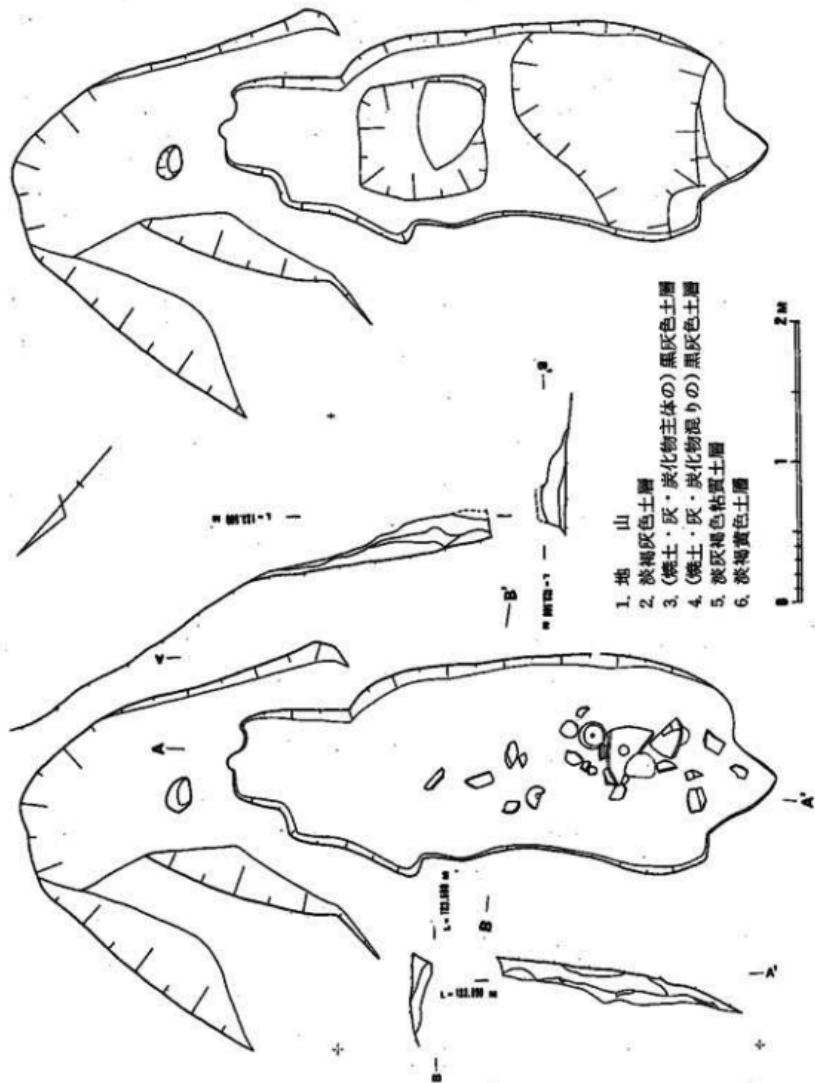
1. 鳥糞山遺跡（今回調査地）	18. 天王山遺跡	27. 東沼波遺跡
2. 特別史跡彦根城跡	10. 東山遺跡	28. 五反田遺跡
3. 彦根館遺跡	11. 鏡音寺遺跡	29. 小泉館遺跡
4. 湖東焼窯場跡	12. 原城遺跡	30. 道ノ下遺跡
5. 姫袋遺跡	13. 一ツヤ遺跡	31. 地蔵城遺跡
6. 鏡音寺遺跡	14. 品井戸遺跡	32. 正法寺遺跡
7. 小野城遺跡	15. 雨壺山遺跡	33. 野田山遺跡
8. 安養寺館遺跡	16. 天王山北遺跡	25. 木戸口遺跡
9. 里根山城遺跡	17. 山畑遺跡	26. 山之脇遺跡



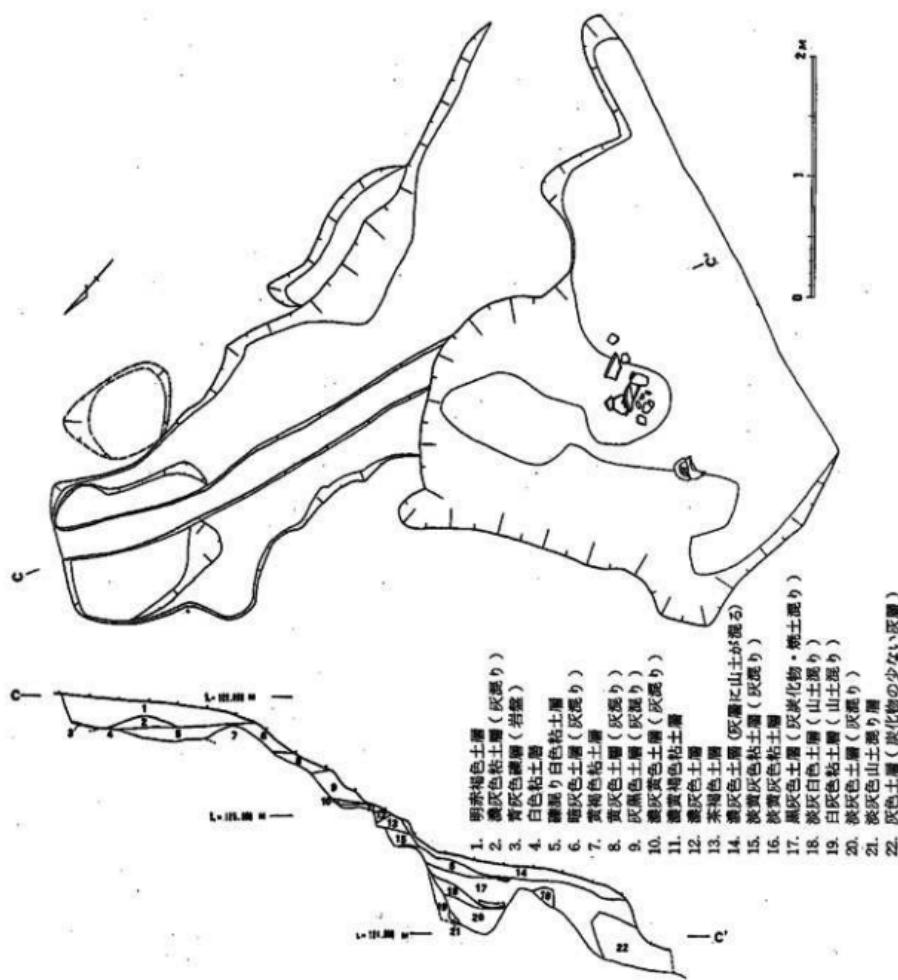
図版2 烏鷺山遺跡トレンチ配置図



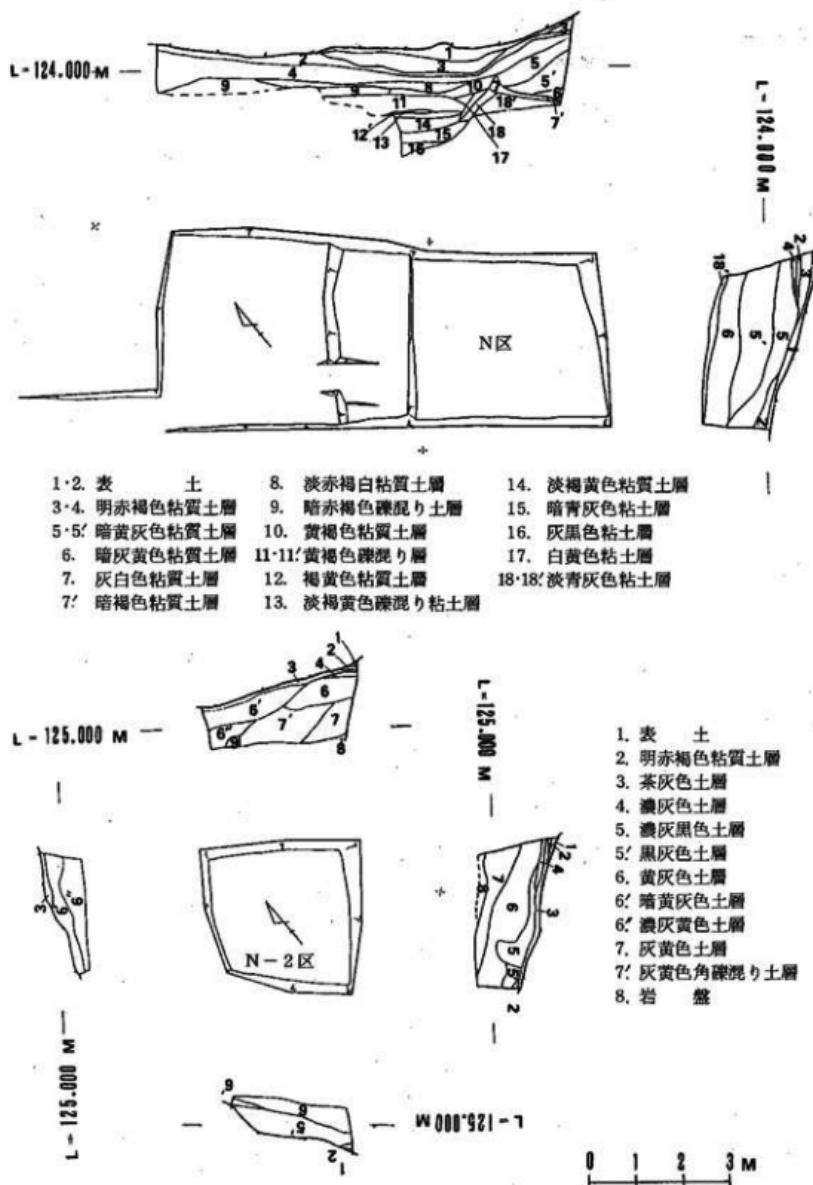
図版3 烏鷺山遺跡E・W区トレンチ図



図版4 W区窯跡遺構図および断面図



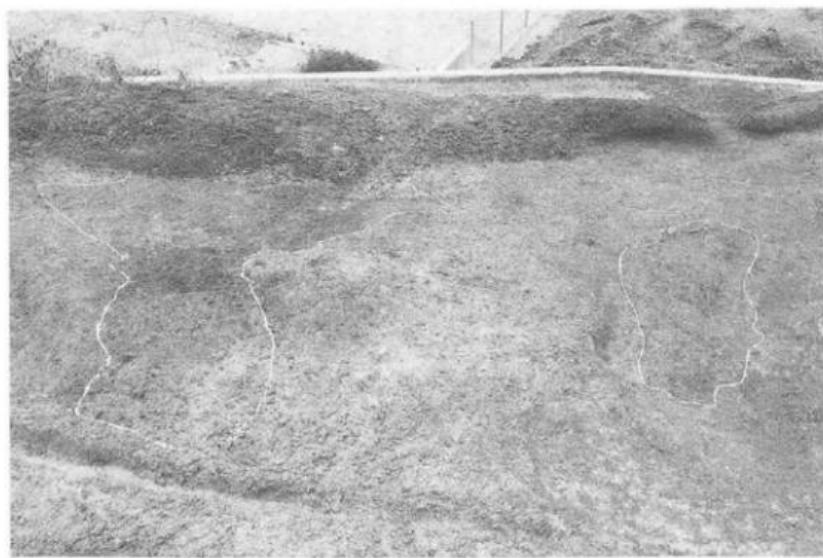
図版5 E区灰化り造構図および断面図



図版6 N区・N-2区トレンチ図および断面図



鳥籠山遺跡試掘調査状況



写真図版 1

鳥籠山遺跡 E・W区遺構検出状況

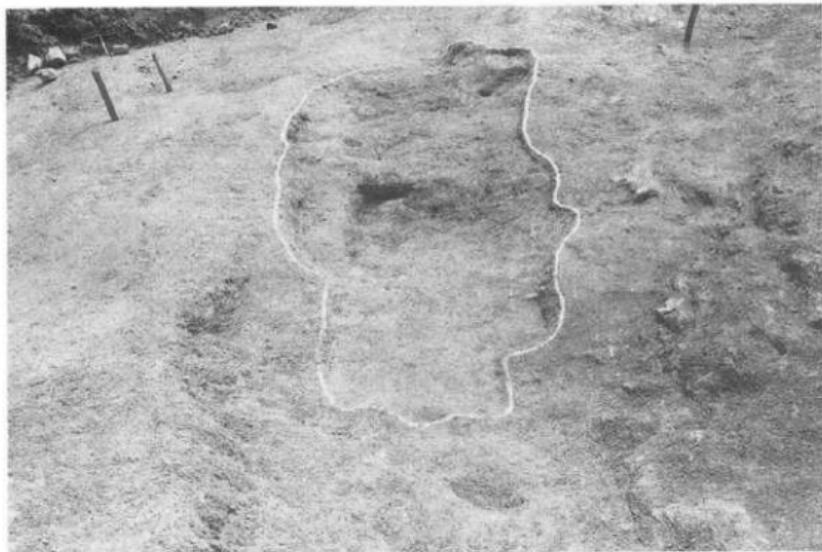


鳥籠山遺跡 E・W 区窯跡掘り込み状況

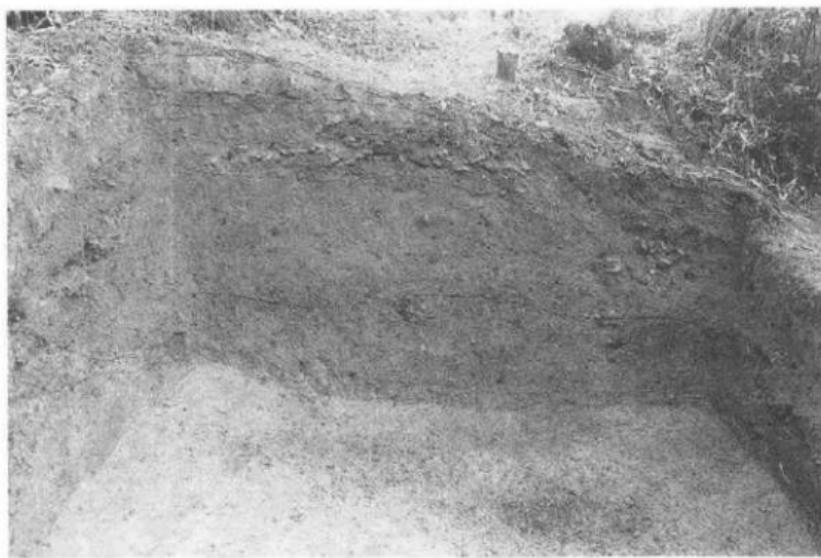


写真図版 2

鳥籠山遺跡 E・W 区窯跡遺物出土状況



鳥籠山遺跡 E・W 区 無縫掘り込み完了後



写真図版 3

鳥籠山遺跡 N-2 区 東壁断面

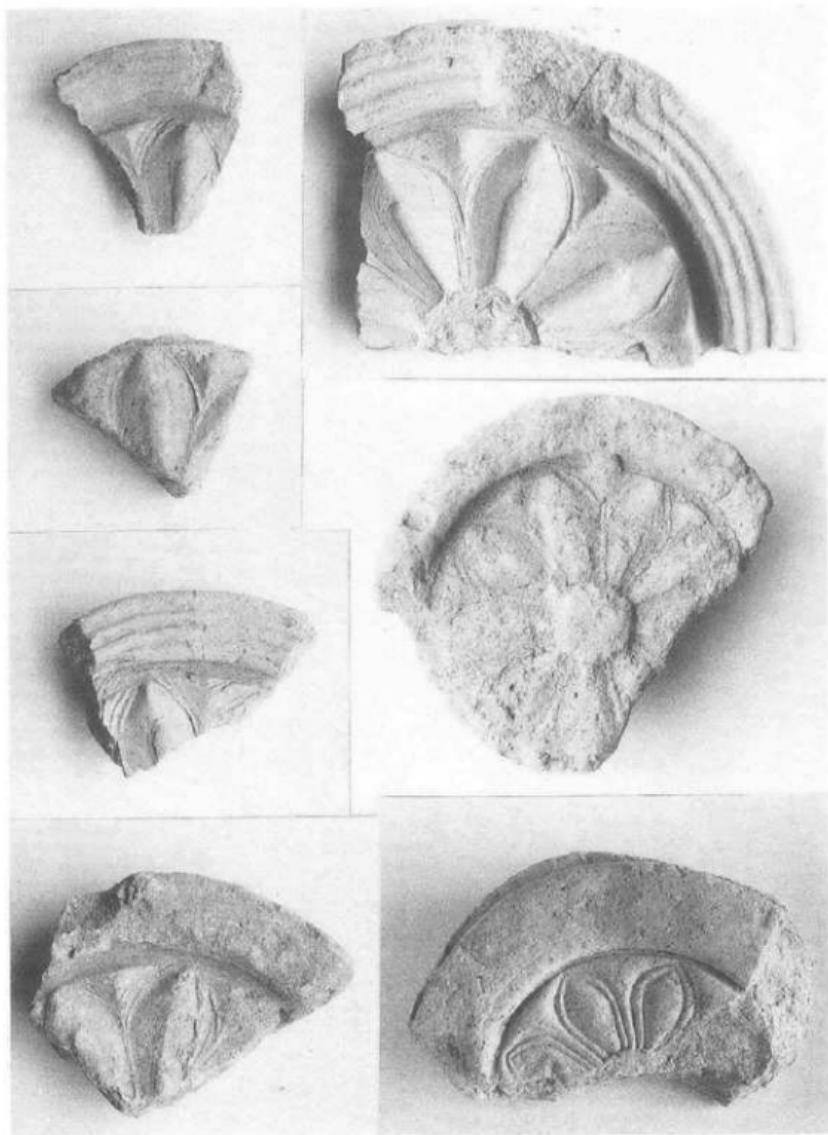


鳥籠山遺跡 E 区粘土採取跡掘り込み状況



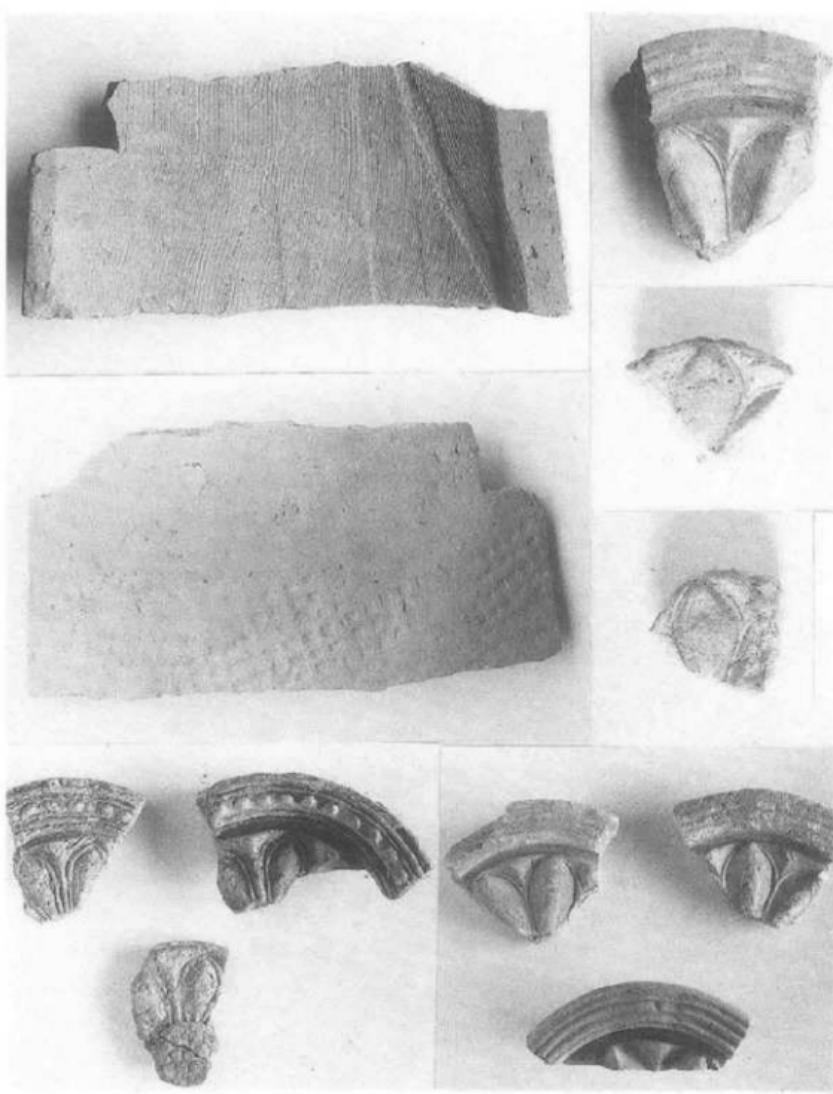
写真図版 4

鳥籠山遺跡 E 区粘土採取跡遺物出土状況



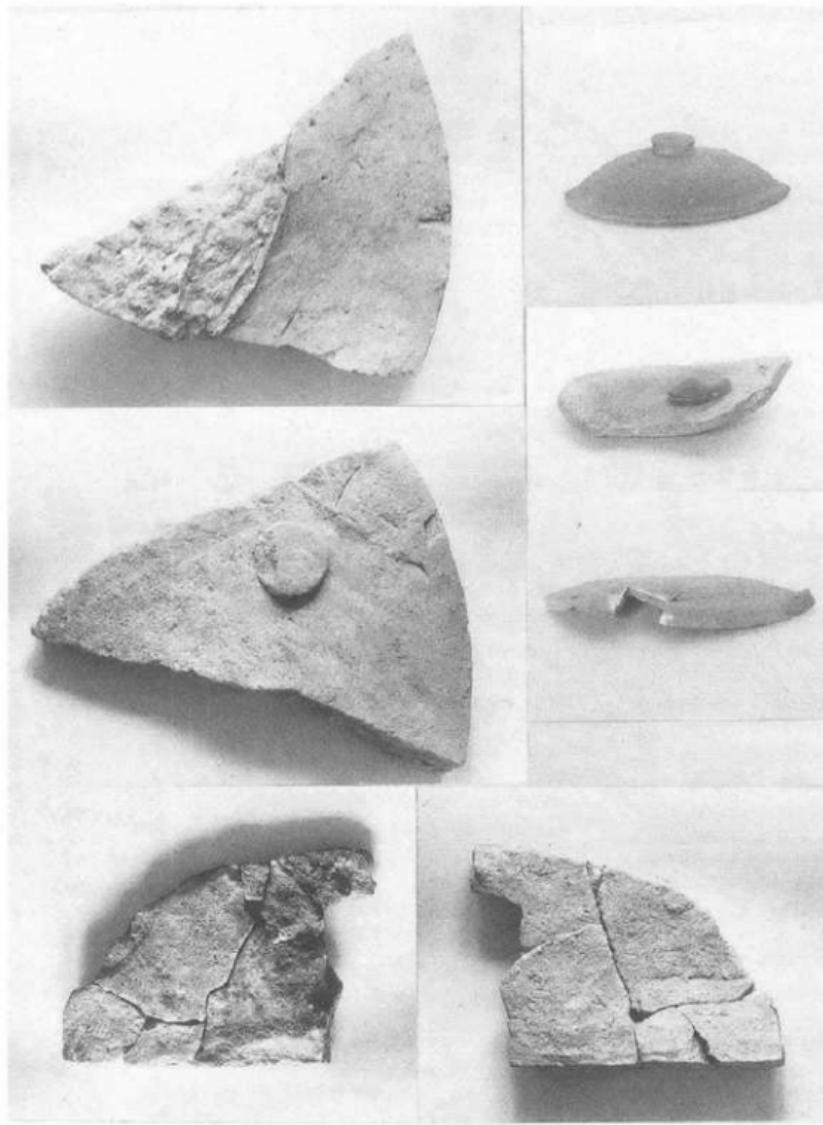
写真図版 5

烏籠山遺跡出土遺物



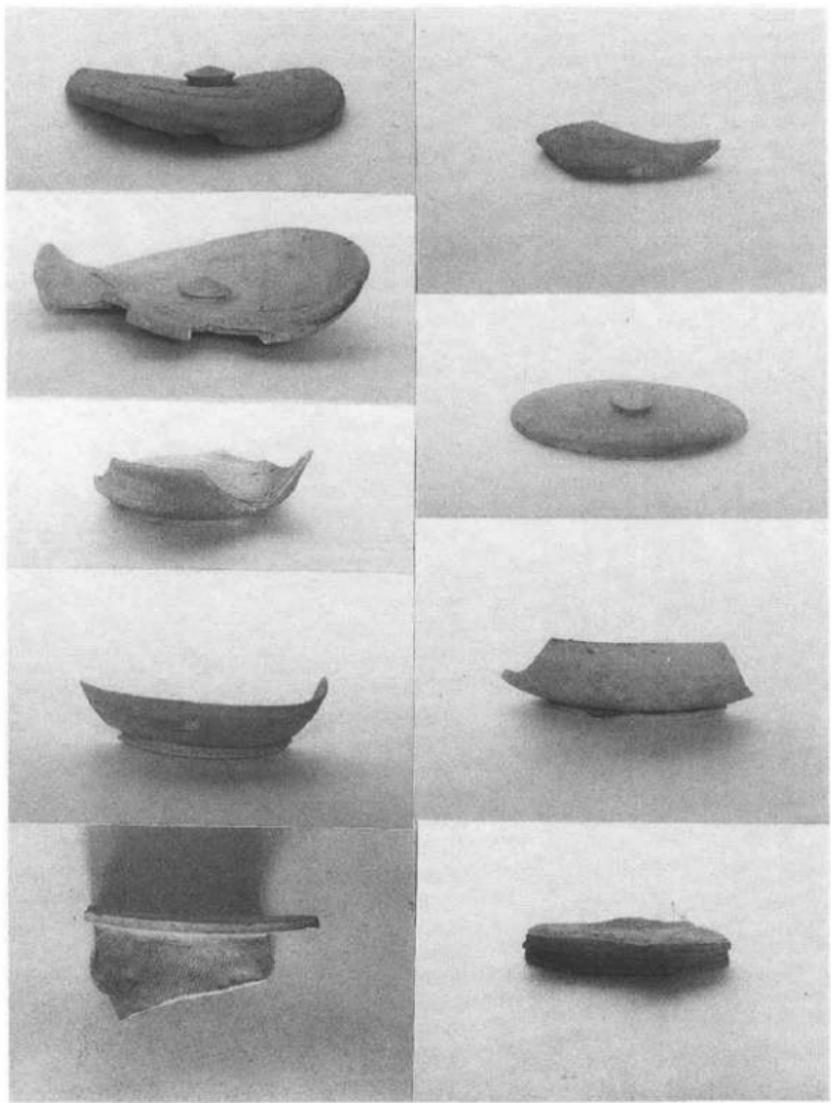
写真図版 6

烏鵲山遺跡出土遺物



写真図版 7

鳥籠山遺跡窯跡出土遺物



写真図版 8

鳥龍山遺跡窯跡出土遺物

彦根市埋蔵文化財調査報告第23集
鳥籠山遺跡発掘調査概要報告書

平成4年3月

編集 彦根市教育委員会

発行 彦根市教育委員会

印刷 ブツクシ出版印刷

